



日本画の枠にとらわれない豊かな色彩表現 日本画家 村松 乙彦

設楽町立津具小学校長 伊藤 昭康

津具の七賢人 村松乙彦

設楽町津具総合支所には、かつて「津具村」であった頃の「津具村偉人の像」があります。津具の七賢人も称され、その偉業が後世にまで称えられていきます。ここでは、今もその作品を鑑賞することができる日本画家の村松乙彦を紹介します。

村松乙彦は、大正元年、津具村で生まれました。大正14年、下津具尋常高等小学校尋常科を卒業し、静岡県立浜松第一中学校（現在の浜松北高等学校）へ進み、昭和3年、法政大学文学部仏文科予科に入学。併せて夜間に太平洋絵画研究所にて油絵を学び始めました。この時、油絵の色彩の美しさに魅力を感じ、油彩画家を目指してフラ



津具村偉人の像（設楽町津具総合支所）

ンス行きを夢見ていたようです。ところが、ある時、田原市出身の渡辺華山の絵画展を見て大いに感動し、日本画への転向を決意しました。その決意は固く、大学を中退し、日本美術学校日本画科に入学したのです。

昭和10年、同校を卒業すると、河合玉堂の門下である児玉希望に師事し、日本画家への道を歩み始めます。昭和16年、『珊瑚礁の渚』が、第4回文展にて初入選し、画壇において注目されましたが、第二次世界大戦中の昭和17年から18年にかけて、海軍報道班員としてフィリピン、ボルネオ、セレベスといった戦地に同行し、従軍画家として戦争美術の制作を強いられました。一方で乙彦は、日本画家としてのアイデンティティももち続けていました。

戦争美術関係の展覧会では、昭和18年の第2回大東亜戦争美術展に出品しています。また、昭和16年の第5回海洋美術展から昭和19年の第8回まで、毎年作品を出していました。

戦後、再び画家として活動を始めた乙彦は、昭和21年に開催された第2回日展より作品を出品し始めます。昭和24年第5回日展では『浮島の朝』が、昭和26年第7回日展では『快晴』が特選を受賞し、その実力が高く評価されました。翌年には無鑑査で出品できるようになり、昭和28年からは依頼出品となりました。

さらに、昭和33年の第1回新日展で委員、昭和35年に審査員を務め、昭和37年には日展会員となります。この後、たびたび審査員を務めましたが、昭和41年より評議員となり、『月の庭』（昭和44年改組第1回日展）、『しれとこ』（昭和48年第5回日展）等を発表しました。日展における活躍のほかにも、昭和33年に一年間の渡欧の後、日本美術家連盟監事・国際美術協議会委員を務めています。その後、昭和58年に腹膜炎を患い、東京において71年間の生涯を閉じました。

作風の転換〜豊かな色彩表現へ

創作の初期から中期は、風景を背景に置いた人物画や静物画を手がけていました。また、海洋画家としても知られており、海をモチーフとした風景画も多く残されています。いずれも、パステル調の穏健な色合いで、注目作品である『珊瑚礁の渚』も、セピアカラーのやわらかな雰囲気画風でした。ところが、晩年になるにつれて、色彩表現がより鮮やかになり、対象を単なる写実で描くのではなく、内面的な感情や精神性を表現する方向に進化しました。これは、彼の画業全体を貫く自然への深い洞察と、精神的な探求が結実した結果と言われていますが、昭和36年の渡欧が、彼の色彩感覚に大きな影響を与えたと考えられます。ヨーロッパの光や色彩、そして西洋美術がもつ独自の表現方法にふれたことで、従来の日本画の枠を超えた新しい表現を追求するきっかけになったのかもしれない。また、印象派やフォービズムなど、色彩を重視する画家たちの影響も考えられます。昭和47年に発表された『オモロ』は、そうした変化が結実した作品といえるでしょう。

また、伝統的な日本画の顔料に加え、新しい顔料や画材も試行錯誤しながら取り入れ、彼独自の色彩を作り出します。これにより、自然界で感じる微妙な色の変化を、より忠実に、あるいはより強調して表現できるようになりました。



『珊瑚礁の渚』(昭和16年)



『オモロ』(昭和47年)



岩石から作り出した顔料

文化・芸術への思い

乙彦は、画家としてのキャリアを重なる一方で、他の文化領域にも関心をもち、関わっていきました。後に国の重要文化財に指定された大森貝塚の保存会では副会長を務め、その文化的意義の啓発と保存に努めています。

また、ふるさと津具に対する愛着は、画家として活躍する中でもち続けていました。昭和26年の旧下津具小学校講堂の落成式では、雲間にそびえる富士山の絵画（本誌表紙に掲載）を寄贈しました。この作品は、現在も津具小学校の校長室に飾られています。また、当時の津具村教育委員会が発刊した小学生向けの社会科副読本「わたしたちのつぐ」においては、表紙画を含めいくつかの挿絵を提供したり、津具村学校沿革誌に小学生時代の回顧録を残したりしています。



『わたしたちのつぐ』(昭和56年)

鑑賞のすすめ

村松乙彦の作品は、現在、愛知県美術館や東京にある現代日本画専門の山種美術館、設楽町津具文化資料展示センターに所蔵されています。

特に、津具文化資料展示センターには、ここで紹介した『オモロ』をはじめ、絵画や原画といった作品群、スケッチや画材、評論などの貴重な資料もあわせて展示されています。ただし、お越しの際は、「道の駅したら」に併設されている奥三河郷土館（電話0536-62-1440）にご連絡いただき、予約のうえ鑑賞してください。お待ちしております。



奥三河郷土館



津具文化資料展示センター

